

地域のまちづくりに関する施策の提案

産業・経済・交通 編



平成23年2月

宇都宮市上河内自治会議

2 上河内地域の産業・経済・交通

(1) 現状と課題

◇農業の将来性に不安

上河内は、豊かな自然環境に恵まれ、農業を中心に発展してきたが、農業従事者の減少・耕作放棄地の増加・担い手の高齢化等により、安定した経営が難しい。

◇働くところが少ない

地域には働く場所が少なく、とくに女性の働く場所が少ないため、地域外へ働きに出ている。

◇交通の便が悪い

道路および公共交通の整備が不十分で、全体として交通の利便性が悪く、とくに高齢者等の交通弱者の移動に困難が生じている。

(2) 10年後の理想像

上河内の農業や雇用については、農作物のブランド化や農工商連携（6次産業化）により、農業の付加価値を高め、地域の魅力ある基盤産業として再生されています。併せて、「農」を活かした観光農園などの様々な事業や取組みが数多く展開されており、農業を核とした多様な就業機会が創出されています。

上河内の交通については、生活道路や歩道が整備され、高齢者等の交通弱者が安心・安全に暮らしていける地域が形成されています。また、上河内スマート IC がもたらす広域的な交通ネットワークのメリットを活かし、周辺地域に新たな交流や物流の拠点が形成されることにより、上河内が生活と産業の広域的な結節点となっています。

そして、人々の温もりのある協働のまちづくりと、多様な地域資源を活用した地域ぐるみの観光振興により、地域内外の人との連帯と交流が深まり、「住んでよし来てよし」の上河内が実現しています。

3 地域のまちづくりに関する施策の提案

(1) 産業・経済・交通を発展させるための目標

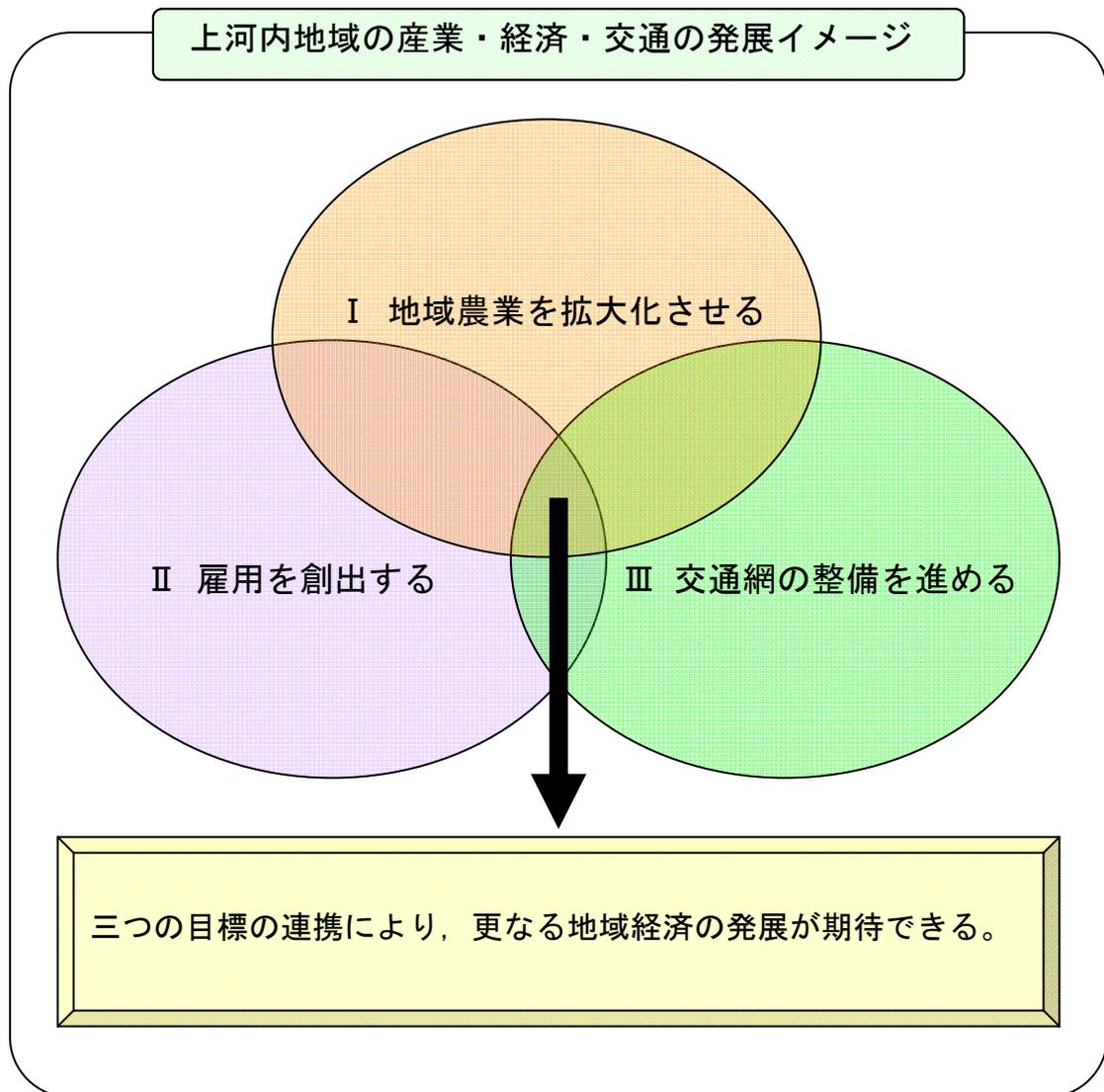
地域の現状と課題を踏まえ、上河内地域の産業・経済・交通を発展させるための10年後の目標を、

「Ⅰ 地域農業を拡大化させる」

「Ⅱ 雇用を創出する」

「Ⅲ 交通網の整備を進める」に決めました。

また、三つの目標が互いに係わり合い連携することで、更なる地域経済の発展につながると考えます。



(2) 目標を達成するための方策

I 地域農業を拡大化させる

方策1 地域農産物を活かした特産化やブランド化の推進

上河内ならではの特産品の開発や地域農産物の品質を高めるブランド化により、消費者の評価を得ることで、地域農産物の生産量を向上させる。また、地域内で生産から加工・販売まで行う6次産業化を推進し、付加価値の域外漏出を防ぐことで、地域の所得を高め、経済と農業の更なる拡大につなげる。

方策2 観光農園や体験農園の充実・強化と観光まちづくりとの連携

様々な農作物を対象とした観光農園や体験農業を充実・強化し、地域農業の活性化を図る。また、これらを地域の観光資源として活用し、観光まちづくりと連携させることで、地域農業の魅力を向上させる。

II 雇用を創出する

方策3 農業法人の設立と農業の6次産業化

農業法人の設立を進め、農業規模の拡大を図ることで、農業に携わる人の雇用を創出する。また、生産から加工・販売まで行う6次産業化の推進により、農業に関連する事業（加工・販売）を拡大させ、更なる地域の雇用を創出する。

方策4 地域資源を活かした観光振興

上河内の象徴である山（羽黒山）・川（鬼怒川）・温泉（梵天の湯）の3大資源をはじめとする名所・旧跡や観光農園・体験農園を活かした観光の振興を図り、地域の雇用を創出する。

方策5 スマートIC周辺を中心とした産業の開発・誘致

フルインター化した上河内スマートICの周辺地域に、物流・交流施設等を開発・誘致することで、農業の6次産業化や観光まちづくりとの相乗効果を高め、地域の雇用を創出する。

III 交通網の整備を進める

方策6 道路整備の推進

車依存型社会からの脱却をめざしつつ、産業・経済を支える基盤となる必要な道路整備は推進し、地域経済の活性化を図る。また、高齢者等の交通弱者のために歩道を付置するなど、安全で移動しやすい生活道路を整備することで、地域住民の生活利便性の向上を図る。

方策7 公共交通の充実

生活・産業・経済を支える人々の足となる「環境と人にやさしい公共交通」を充実させることで、活力ある住みやすいまちづくりを推進する。

4 実行プラン

(1) 実施内容

目標	方 策	具体的な取り組み	内 容
地域農業を拡大させる	方策1 地域農産物を活かした特産化やブランド化の推進	①ゆずやいちごを利用した特産品の開発 ②特産品のブランド化 ③生産・加工・販売までの6次産業化	ゆずやいちごを利用・加工し、付加価値の高い商品開発をめざすとともに、商品のネーミング等にも力を入れ、地域ブランド化を図ることで商品や地域の知名度を向上させる。また、インターネットや直売所等による販路開拓を通じ、流通コストを削減させることも必要である。
	方策2 観光農園や体験農園の充実・強化と観光まちづくりとの連携	①ゆずやいちごの観光農園の拡大 ②地域の観光資源(梵天の湯等)を活用した園芸作物の開発と農業の振興	ゆずやいちごの観光農園を創出し、特産化やブランド化により知名度が上がったゆずやいちごを量産する。また、梵天の湯の温泉熱を利用した園芸作物の開発や野菜を収穫体験できる体制を構築し、観光振興と連携させて地域内外の人との交流を推進することで、地域と農業を活性化させる。
雇用を創出する	方策3 農業法人の設立と農業の6次産業化	①地域ぐるみの農業法人化 ②農業法人による6次産業化の推進	異なる農産物を作っている農家が集まって農業を法人化し、商品の多様化による生産規模の拡大や6次産業化を推進することで、更なる雇用創出の受け皿とする。また、農業法人になるためのノウハウや成功例を参考に、消費者ニーズに対応した柔軟性のある経営方法の検討が必要である。
	方策4 地域資源を活かした観光振興	①羽黒山を核とする地域資源を活かした観光振興 ②観光を地域特産品の販売促進の視点からも追求	羽黒山・観光ゆず園・キャンプ場・梵天の湯などの連携による観光コースの設置や観光マップを作成することで、観光振興の基盤を確立する。また、観光案内所を兼ねた道の駅を設置し、来客者へのおもてなしを向上させるとともに、地域の特産品の販売促進にもつなげる。
	方策5 スマートIC周辺を中心とした産業の開発・誘致	①物流・交流拠点(施設)の開発と誘致 ②農業の6次産業化や観光まちづくりとの連携	スマートICのフルインター化による周辺地域の産業の発展が、地域の経済に大きな利益をもたらすには、インターの利点を活かせる物流・交流拠点の開発・誘致が望まれる。また、その経済効果を地域全体に波及させていくためには、それが域内の農業や観光と連携し、地域の産業経済の発展につながるように、開発計画を考える必要がある。
交通網の整備を進める	方策6 道路整備の推進	①安全性を確保するための歩道の整備 ②生活・産業・経済に不可欠な国・県・市道の整備	スマートICがフルインター化されたことにより、大型車両の乗り降りが可能になったため、安全性確保の面から、早急に歩道の整備が必要である。また、生活・産業・経済の改善・発展のため、地域内の道路を整備することも必要である。
	方策7 公共交通の充実	①ユッピー号の利便性向上 ②地域に合った公共交通の導入	地域の生活・経済を支えるユッピー号の利便性向上をめざして、運行内容(自由乗降など)を検討するとともに、地域の意見を十分に反映させ、利用者ニーズに対応した運行を行う。また、上河内地域のニーズに合った新たな公共交通の導入についても検討する必要がある。

(2) スケジュール

目標	地域農業を拡大化させる		雇用を創出する			交通網の整備を進める	
方策	方策1	方策2	方策3	方策4	方策5	方策6	方策7
	地域農産物を活かした特産化やブランド化の推進	観光農園や体験農園の充実・強化と観光まちづくりとの連携	農業法人の設立と農業の6次産業化	地域資源を活かした観光振興	スマートIC周辺を中心とした産業の開発・誘致	道路整備の推進	公共交通の充実
3年後までに	地域農産物のブランド戦略・推進体制の確立	ゆずやいちご観光農園の創出と拡大	農業法人の設立(共同経営)	地域観光振興計画の策定	スマートIC周辺の都市開発計画の検討	スマートIC周辺の歩道の整備	ユッピー号の利便性向上について検討
	付加価値の高い特産品の開発	観光振興との連携		観光コースの設定や観光マップの作成			地域に合った公共交通の検討
	特産品のブランド化						
5年後までに	インターネット販売等による販路拡大	ゆずやいちごの量産化	農業法人による6次産業化の推進	ホームページ等による観光情報の発信			利用者ニーズに対応したユッピー号の運行
		野菜収穫体験農園の開発					
10年後までに	消費者ニーズに対応したブランド品の管理	温泉熱を利用した園芸作物の開発	消費者ニーズに対応した農業法人の経営	観光案内所を兼ねた道の駅の開発	スマートIC周辺に物流・交流施設の開発・誘致	地域内の道路の整備	地域に合った公共交通の導入
					農業や観光との連携		

主に地域団体等が取り組むもの

主に行政に望むもの